

授業研究の進め方

研究調査チーム

「進みつつある教師のみ、人を教える権利あり」

これは、ドイツの教員養成学校の初代校長であったディステルヴェーグ(Diesterweg、1790～1866)の言葉です。また、下村哲夫氏は「教職が専門職であるということと、教師が教育の専門家であるということとの間には基本的な違いがあるようだ・・・。本物の教育の専門家になれるかどうかは、教職についてからの本人の努力である。」として、自己研鑽の大切さを説いています。

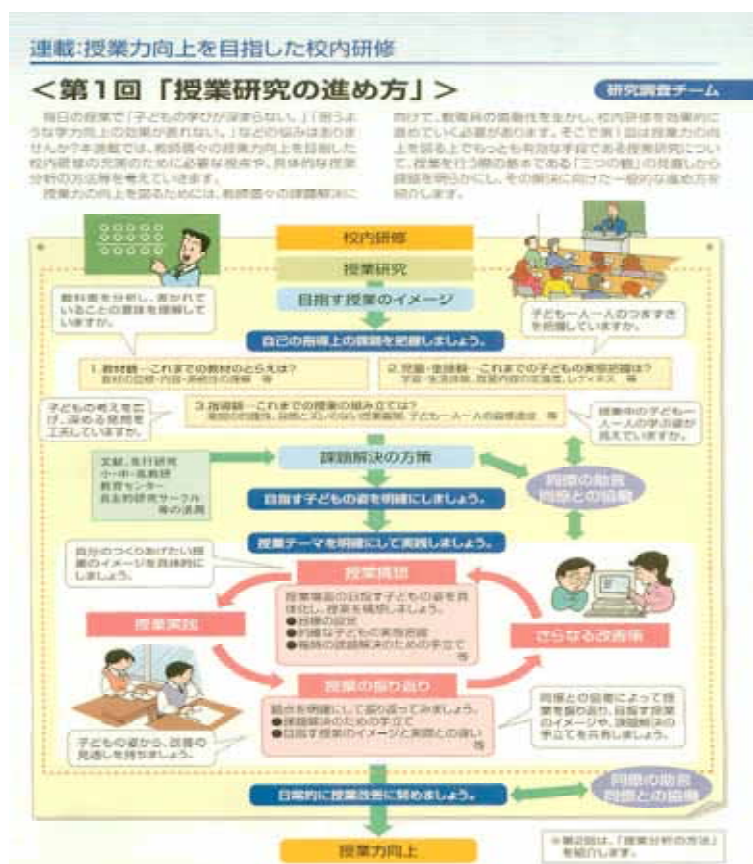
私たち教師の究極の喜びは、目の前の子どもたちがそれぞれの個性を發揮し、自己の天分をさらに向上させている姿を見るときではないでしょうか。

そのためには、私たち教師は、豊かで確かな指導力をふだんから培っておかなければならないと思います。そのような努力を積み重ねることによって、一人一人の子どもの想いや内に秘めた光るものを、きちんをとらえる感性を磨くことができるのだと思います。

子どもの持つ可能性を掘り起こすためには、子どもの行動や言葉を通して、子どもの想いや願いを敏感に感じ取れる新鮮で豊かな感性をもっていなければならないように思います。

その感性は、教師自らが学ぶ努力をすることによって育つのです。

教師の学ぶ場として、私たちは今回、校内研修、その中でも授業研究に焦点を当てました。「授業研究の進め方」に具体的に視点を当てつつ、その一つ一つの項目に隠されたメッセージや意味を考えてみましょう。



リーフレット「授業研究の進め方」

1 自己の指導上の課題を把握しましょう

私たち教師は、子どもが自分のよさや可能性を発揮し生き生きと活動している姿を見ると、教師であることの喜びを強く感じます。

しかしながら、目の前の子どもの現実の姿を見つめてみると、このような姿が、いつでも、どの活動でも見られるかという、残念ながらそうではない姿もまだまだ多く見られるのではないのでしょうか。

授業中、「何をやるのか、どうやっていいのかわからないでいる子」「落ち着いて学習や活動に取り組めない子」「嫌いだからと言って本気になって練習しようとしないう子」などなど。その様相は実に多様であり、個人差も大きいようです。



本来どんなことにも挑戦したが、瞳を輝かせて活動するはずの子どもが、このようになっている原因はどこにあるのでしょうか。

この原因を、私たち教師側の問題とするか、それとも子ども側のものとするかによって、教師の子どもへのかかわり方は自ずと違ってくるのではないのでしょうか。

ややもすると、子どもの側に問題があるような発言を耳にすることがありますが、本当にそうなのでしょうか。もし、そうだとした場合、子ども側のみの問題として片付けてしまってよいのでしょうか。私たち教師が、このような責任回避の姿勢をとっている限りにおいては、子どもの現状の姿を変えていくことには結び付かないのではないかと考えます。

子どものつまずきに対して、「何とか力になってあげたい。」「この子をこのように変えていきたい。」という教師の思いが、教師と子どもを結び付ける教育の基盤ではないのでしょうか。

目の前の子どもの日々の生活や学習の有り様を自分の眼で確かに見つめとらえ、子どもの思いや願いをしっかりと受け止めて、この子を何とかしたいと思い願う教師は、教師として、学ぶ子どもに寄り添い、この子をさらに向上させたいと想う心に溢れているということでしょう。

このように『何とかこの子を、こんな姿に変えていきたい。』と強く思い願う教師の心が、「子どもを変える」ことにつながると考えます。

そこで、「この子を変えたい」という教師の強い願いを実現するために、これまでの自分の授業に臨む考え方や指導の在り方を振り返ることから始めてみましょう。

(1) 教材観

教材といってすぐに思い浮かぶのは教科書かもしれませんが、しかし、その教科書も学習指導要領に基づいて作成されたものですから、私たち教師がまずもって頭に入れておかなければならないものが学習指導要領です。また、それぞれの教科等の解説編も併せて発行されていますから、日々の授業の際に、また、授業研究の際にはまず、最初に目を通さなければなりません。

その上で、教科書の教材、あるいは単元を研究してみましょ。学習指導要領の内容が、どこで、どのように具現化されているのが注意して研究してみましょ。また、教科書の単元の配列や順序にも、すべて意味があります。その論理を把握するのに役立つのが文献です。やはり教師たるもの、気になる教育図書はぜひ手元に置きたいものです。

教科書に沿って授業を展開することも大切ですが、目の前の子どもの実態に即していくことも同時に重要です。さらに、教科書の理解はもちろん、その行間に隠された理念、考え方、あるいは論理を教師がどれだけ理解しているかによって、授業の奥深さが決まるといっても過言ではあ

りません。

授業においては、教材研究の深さが、子どもの反応に対する教師の的確な対応を決定づけます。学習指導要領と教科書を見比べ、目の前の子どもを頭に描きながら徹底的に教材研究を深めていきたいものです。そうすると、後に述べる指導観が自然と思われ描かれるものと考えます。

ここで、さらに付け加えたいことは、「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」ということです。教科書は「主たる教材」ですから、今使用している教科書以外にも目を通して研究してみると、さらに視野が広がります。各地区の教科書センターや教育センターで、全国で使用されている教科書の見本を閲覧することができます。ぜひ活用してください。

(2) 児童・生徒観

学校で学ぶ主体者は、まさに私たちの目の前にいる子どもであり、私たち教師の一挙手一投足は、自分の目の前にいる子どもの持つ優れた能力を掘り起こすことに外ならないといっても過言ではありません。

したがって、私たち教師が、研修によって自らの資質を高めるのは、目の前の子どもの想いや願いが叶えられるようにするためであると、とらえていかなければならないように思います。

しかし、いくら研修を積んでも、それが日々の教育実践に生かされず、また、子どもの姿に反映されなければ、研修の意義や価値は見い出せません。そのためには、私たちの進める研修は、子どものためにあることを常に意識し、研修内容の一つ一つが、子どもにとってどんな意味をもっているかを考えながら進めるとともに、その成果を毎日の教育活動に生かし、実践していくことが必要であると考えます。

教員研修をこのようにとらえると、私たちの進める研修は、自分の目の前の、多様な姿を見せている子どもの現実を、確かに見つめとらえることから出発しなければならないと考えます。

子どもを見つめとらえる

授業中、「えっ！この子がこんなこともわからないの？」とか、「意外だな、この子がこんなこともできるなんて。」などと、予想もしない場面に出会ったことはありませんか。特に、学校訪問とか研究授業のような教師にとって緊張感のある時にそのようなことが往々にして起き、戸惑うことがあります。

子どもたちの意外な反応に柔軟に対応するには、できるだけ、事前に子どもたちの実態を細部にわたって把握し、反応を予想しておくことが大切です。そうすれば、個に応じた多様な準備もできるし、子どもたちの多様な考え方に対応することができ、そのことによって子どもたち一人一人が瞳を輝かせながら学習に参加できるようになるのではないのでしょうか。

その際に注意しなければならないことは、一度把握した実態を決して固定的に考えないことです。常に新たな目で子どもたちを見つめ、一人一人の子どものよさや可能性を伸ばし、高め、豊かにするよう留意することが大切でしょう。

子ども理解のために把握したいこととして、次のようなことが挙げられます。

・興味・関心	・考え方	・感じ方	・意欲・態度（学び方も含む）
・表現の傾向	・理解の仕方	・学習体験	
・学習する単元（題材）の基礎となる既習事項の理解度			など

子どもたちの実態を的確に把握しておくことは、一人一人の子どもの変容をとらえ、どの子が、何について、どう反応し、どこまで、どのように理解したか等「評価」を確実にを行う上でも大事なこと

です。

また、自分の授業についても、どこが、どうだったから、授業構想どおりにいったのか、いかなかったのか、反省・評価することも可能になります。

そのためには、常に子どもたちの実態を記録し、累積するとともに、事前テストや事後テスト、把持テストを実施し、その結果を考察しておくことが必要不可欠なことでしょう。

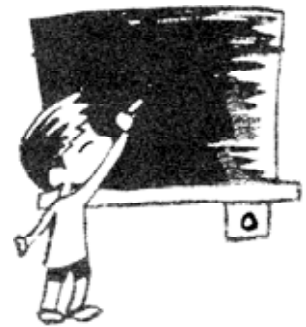
(3) 指導観

これまで述べてきた「教材観」と「児童・生徒観」をしっかり持っていれば、あとはそれらを「目標 - 子ども - 教材」という関係の中で、「最適化」の方向に練り上げていけばよいのです。教材についてどんなに研究したとしても、それが目標達成にどう生きるのか、あるいは、子どもたちにその教材を主体的に受け止める実態があるのかどうか、といったことの関係を考慮しなければ、単に知識を広げ、資料を集めるだけの作業になってしまいます。子どもの実態についても、目標や教材とのかかわりでとらえることによって、はじめて実態把握といえます。

その「最適化」を進めていく上で、授業構想や授業展開の中に「自己の指導上の課題」の解決策を講じていく必要があります。

このような観点のもと、実際の授業を行うにあたっては、指導技術も必要になってきます。

例えば次のような項目について、具体的な方法や内容を考えてみましょう。



もっと子どもを引きつける発問をしたい。

板書についてのノウ・ハウを知りたい

目的を持ったノートづくりをさせたい

効果的なグループ学習の在り方 等

(参考資料 「日々の授業のブラッシュアップ Vol.1、Vol.2」福島県教育委員会)

2 目指す子どもの姿を明確にしましょう

『この子をこのように変えたい』という教師の想いは、その教師の「めざす子どもの姿」そのものであり、この子の現実の姿を見て、自分の指導の足りなさに気づき、教師自身が自分を変える意識を持ち、「今までとは違った自分」になることを目指すことによって、初めて目の前の子どもを変えることができるのだと思います。まさに、「進みつつある教師のみ、人を教える権利あり」です。

このように考えると、私たちの進める研修は、まずは目の前の子どもの姿を教師自身の問題として受け止め、子どもの見せている現実の姿を、どのように変えていきたいのかをしっかりと見定めて、自己研修の課題を見出ししていくことから出発することが大切であるということになります。

子どもを支援し、教える教師が、育てたい子どもの姿を明確にして、目の前の子どもの現実の姿を変えていこうと努力したとき、自分の実践の中から子どもに生じている問題点がはっきり見え、問題を解決する方策も具体的なものとなってくるのです。

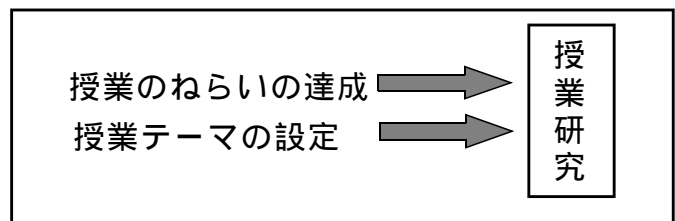
3 授業テーマを明確にして実践しましょう

授業研究の場合、授業のねらいの達成という大きな目的のほかに、日頃から解決を迫られている自分の「授業課題の解決」という目的もあります。

ですから、授業研究のための授業案を作成するような場合、私たちは自分の授業を「よい授業」にするための様々な方策を取り入れようとし、結果的に盛り込み過ぎの授業案になっていることもあります。

自分の授業を改善し、磨きをかけるような授業研究にするためには、その授業研究で「明らかにしたいこと」「確かめたいこと」などを絞り込むことが大切です。

学校の研究テーマを受けて授業研究する場合でも、研究テーマをより具体的な視点から見直すとともに自分の授業課題とのかかわりを明らかにし、授業テーマを明確にして授業に臨むことが大切です（右図）。



実践を進めていく上での配慮

研修に参加する教師一人一人が自分の果たすべき役割を持っている。

校内における授業研究の場合、分担にしたがって子どもや教師の言動を記録し、事後研究会等においてそれを報告するということがあります。

その際、単にその役割を担うにとどまらず、授業テーマを自分のものとして受け止め、自分の授業とのかかわりも考えながら研修に参加し、協議では積極的に意見を述べていくことが大事です。

研修に参加する教師一人一人が解決しなければならない自分なりの課題を持っている。

各学校とも実情は異なり、それぞれに教育課題を抱え、その解決のために校内研修が行われています。組織の一員として教育課題解決を目指す役割を持つのは当然であり、さらに自分が抱えている課題は何なのか、という自己課題をもち、それを意識して研修にかかわっていく必要があります。

研修の場では、立場や年齢にこだわらずに本音の意見を述べ合うことができるようになっていく。

若い先生からベテランの先生まで、校内研修に参加する先生は実に様々です。年齢、経験等の違いを踏まえながらも、先生方一人一人の個性が生かされ、主体的にかかわっていくような研修が望まれます。そのためには、事前や事後の研修において、問題の指摘に気を遣ったり、遠慮したり、また、批判的な意見を述べるだけでは研修の成果が上がるとは思いません。積極的かつ建設的に研修に参加していく、いわゆる切磋琢磨の姿勢が求められます。

共有化できる研修テーマの設定がなされている。

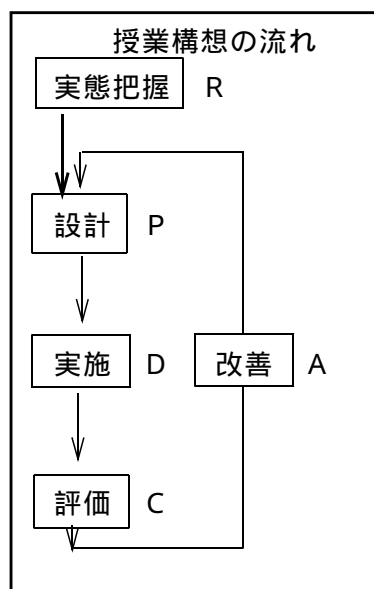
先生方が研修テーマを自己課題としてとらえることができるようにすることは、研修の成果を高める上で大変有効です。一人一人の先生方の研修ニーズが必ずしも同一に集約されにくい場合でも、学年会や教科部会などの分科会に分けたり、年齢や経験に応じたグループによる研修を工夫したりするなど、研究推進に機動性と合理性を持たせることが望まれます。

このように考えると、授業研究をよりよい研修の場にしていくためには、次のような配慮が必要になってきます。

事前・事後の研修の充実を図る。
 授業観察の視点を明確にして授業研究に臨む。
 得られたデータから、子どもたちの変容の様子や教師の指導の在り方の改善を図る。

(1) 授業構想

授業を構想するという場合、構想する授業を1単位時間と考えてはいないでしょうか。1単位時間の授業構想も確かに必要ですが、いわゆる本時の授業構想は、単元全体の構想に支えられて生きてくると考えますので、授業構想は単元全体を見通した構想でなければならないのです。



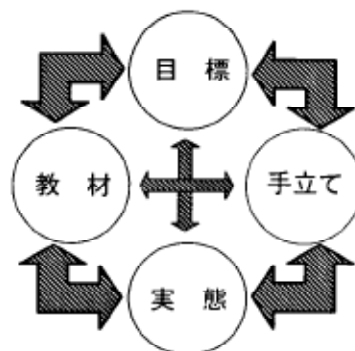
左には、「授業構想」の大きな流れを示しました。

1単位時間を念頭に置いた授業でも設計 - 実施 - 評価という流れはあるわけですが、その授業に臨む私たちは、「授業をどうするか」ということの構想に多くの力を注ぐのではないのでしょうか。つまり、1単位時間の構想では、実施者としての役割が中心になるということです。板書をどうするか、発問は、机間指導は、というように考えるのは、「よい授業」をめざす実施者のあるべき姿を求めていることだと思います。

しかし、先の授業構想の流れを、単元全体として考えると、そこには、評価者としての役割も出てきます。単元の目標とのかかわりで単元全体の構想が適切なかどうか、あるいは、1単位時間内の活動や育てたい能力とどうかかわっているのかなど、評価者としての厳しい視点を持つことになります。

また、単元全体の授業構想では、特に、実態把握(Reserch) - 設計(Plan) - 実施(Do) - 評価(Check) - 改善(Action)のサイクルを機能させる設計者としての役割が重要です。新しい時代を生きる子どもたちに、どのような力を身に付けてほしいかというところから立ち上がり、この学校で、この授業で、この子どもたちをどうはぐくめるかというように構想する力を磨くということで、教師のデザイナーとしての力量を磨くことなのだと考えます。

なお、授業を構成する要素は、「目標を明確にすること」「教材を研究すること」「子どもの実態をつかむこと」「手立てを考えること」等が考えられます。この構成要素は、右の図に示したように、相互に関連し合います。それぞれの構成要素を明らかにするには「目標 教材 目標」「実態 目標 実態」のよう先に進めたり戻ったりしながら考えることが大切です。このようにして構成要素を明確にすれば、相互の関係が見え、授業構想が豊かになると考えることができます。



< 授業を構成する要素の関係 >

さらに、自己の課題解決のために「目指す授業のイメージ」を明確にしておくことが必要です。課題やその解決のための手立てを具体的にただけでは、授業において子どもの多様な考えや練り上げに対応することは難しいと考えます。

実際の授業の場面での子どもの「分かった！できた！」という姿を具体的にイメージしてみま

しょう。子どもの姿を授業の各段階で、また、一人一人の子どもの姿を思い描きながら、具体的に考えることによって、そのような姿(学習活動)にするには、教師がどのような発問や教材提示、場の設定をすればよいか明らかになってきます。

授業のイメージを具体的にするには次のような方法が考えられます。

先行研究等で具体的に、できれば映像などをもとにイメージしましょう。

(例)「先進校での授業公開」「教育センターの Web ページ」等

学校にあるこれまでの授業研究のビデオ等の資産を活用して、イメージしましょう。

職場の同僚からこれまでの体験を聞いて、イメージしましょう。また、一緒に目指す子どもの姿を話し合っって具体化してみましょう。

(2) 授業の振り返り

“よい授業”とは、学習する子どもたちにとって「分かる・できる授業」だと考えます。子どもたちが目的意識を持って積極的に学習する授業、子どもたちが知的体験を積み成長する授業、そのような授業ができるようになりたいものです。

そこで、これまで実践してきた一つ一つの取組みについて、もう一度「問い」を持ってみる必要があるのではないのでしょうか。自らの実践に「問い」を持ち、日々の実践を振り返っていくことが、授業改善につながると考えるからです。

授業を振り返る場としての事後研究会では、次の点が大切です。

授業研究は、具体的な事実を通して、授業者の成長を全参加者で"支援"する場であり、共に学び合い、育ち合う場です。

授業研究の中心は、教師自身の授業後の反省と批評です。事後研究会では、正解を求めるのではなく、多様な見方や考え方を具体的な事実(授業)を通して摺り合わせ、共有することが重要です。

そのためにも、授業の難しさや奥深さ、喜びを共有するスタンスが参加者で共有される必要があります。

また、授業で起こった出来事(事実)をもとに、目指した授業のイメージと実際の子どもの姿との違いを明らかにしながら、次のような視点によって振り返ってみましょう。

授業の基盤となる学習態勢

(例)「子どもが相手の話に耳を傾けていたか。」「発言しやすい集団作りができたか。」等
教師の授業スキル

(例)「板書は見やすく構成されていたか。」「一人一人の学習活動に注意を払っていたか。」
等

課題解決のための手立ての有効性

(例)「本時の目標と授業の中心場面がつながっていたか。」「目標に沿った発問であったか。」等

4 同僚の助言・協働意識を活かしましょう

自己の指導上の課題を把握したり、その課題を解決する方策を考えたりするとき、また 1 時間の授業を振り返るときなど、自分一人では、大切なのに気付かなかつたり、「まあいいや」という自身への甘さが出てしまうことがあるのではないのでしょうか。われわれ教師は、一人一人それぞれの見方・考え方を持っています。何人もの教師で、見て、考えることで、一人では気付かない総合的な見方・考え方ができるのではないのでしょうか。教師として、多様な視点で自己を振り返ることは、大切なことであると考えます。特に、経験の浅い教師にとっては、多くの経験をしてきたベテラン教師の見方・考え方は、参考になることが多くあるに違いありません。

5 日常的な授業改善に努めましょう

1 時間の参観授業のために周到な準備をするが、その成果が日常の授業改善につながらないというように、その時だけのイベント的な授業では、目の前の子どもをよりよく変容させることにはつながりません。「継続は力なり」と言われるように、継続的で地道な日々の授業改善が授業を磨き、子どもの確かな学力の向上につながります。

教育の仕事は、経験を積みれば積むほど、またその先が見えてくるものです。また、一つの課題を解決すると、また、新たな解決しなければならない課題が浮上してくるものです。こうしたことを解決して一步一步前進しようとする力の源泉は何かと言えば、それは、教育的情熱という“まだまだの自分の自覚”ではないかと思えます。自分自身の力量不足を自覚し、教育活動にエネルギーを燃やし続けていくことが、力量の向上につながるのだと考えます。

授業研究によって、私たち教師も子どもとともに成長し、子どもにとって「分かる・できる授業」の実現を目指しましょう。

引用・参考文献

- | | | |
|-------------------------------------|------------|--------------|
| 「先生の条件」(p63) | 下村哲夫 | 学陽書房 |
| 子どもと教育「授業研究入門」 | 稲垣忠彦・佐藤 学 | 岩波書店 (1996年) |
| 授業改善ハンドブック「授業の窓」 | | |
| ・ 授業を変える | 福島県教育資料研究会 | (平成9年) |
| ・ 授業を創る | 福島県教育資料研究会 | (平成10年) |
| ・ 授業を磨く | 福島県教育資料研究会 | (平成11年) |
| 所報ふくしま「窓」No.148 「授業力向上のための校内研究の在り方」 | 福島県教育センター | (2006年7月) |